

称号及び氏名	博士（人間科学）	大平 桂一
学位授与の日付	平成27年9月17日	
論文名	王漁洋の詩と詩論	
論文審査委員	主査	大形 徹
	副査	山崎 正純
	副査	村田 京子
	副査	中村 治
	副査	中原 健二（佛教大学文学研究科）

要旨

本論文は清初の詩壇の巨人王漁洋の詩と詩論をとりあげ、彼の青年期揚州時代の文学活動、彼の作詩作法と特徴、王漁洋の詩論の起源と形成、王漁洋の古詩平仄論、四庫全書総目提要の『漁洋山人精華録』における王漁洋の文業に対する評価など、多角的な角度から王漁洋を捉えなおそうと試みたものである。

第一章 王漁洋の初期の文学活動—揚州時代を中心として— 第一節は、彼が秋柳四首を故郷近くの済南大明湖で作り、一挙に名をあげ、科挙に及第した後、最初に赴任した揚州に於ける文学活動をとりあげた。まず彼が揚州において接触した人士を、四つの階層（A層：揚州出身の詩人で、王漁洋より年輩であるか、或いは同年輩の詩人。B層：他所の出身で、明滅亡以後に揚州に移り住んだ、王漁洋より年輩の詩人。C層：当時たびたび揚州にやって来ては王漁洋等名士と唱和した詩人達。D層：揚州出身者で王漁洋よりも年下の詩人たち）に分類し、4番目の階層である「揚州出身者で王漁洋よりも年下の詩人たち」こそが後に生まれる王漁洋の無数の追随者の原型であったことを論じた。第二節では、王漁洋が揚州において詠じた作品の中にはもや・かすみ・微雨などを空間に漂わせたものが多いことを指摘した。さらにそれをもや・かすみ・微雨などが漂う朦朧とした空間を背景としてすでに滅びた明王朝へのオマージュをひそませる技法を多用したことを論じた。第三節では、D層に属する若い世代の士人がこのような技巧を用いた王漁洋の作品群を懸命に模倣して詩人として成長していったことを、若い世代の代表格である汪懋麟の作品をてがかりとして実証した。

第二章 王漁洋の詩の特徴について 第一節では、王漁洋の自選集とも言える『漁洋山人精華録』所収の1696首中、223首の詩に「煙」という概念を含む言葉が使われていることに注目した松村昂の論考に依拠し、王漁洋の詩に頻出する「もや・かすみ・微雨」を「煙」という名で総称すると王漁洋の詩作の最大の特徴がはっきりと見えてくることを論じた。

第二節では、「煙」を用いた空間描写を①即目の詩、②政治的隠喩を含みつつも即目の詩としても観賞に耐えるもの、③絵画に題した詩、の三種類に分け、第一章で詳論した②を除く、①③について論じた。①では、王維、李白、陸龜蒙などの唐代の詩人達の作品と比較しつつ、王漁洋の作品が、唐代の詩人達よりも「煙」たなびく空間の色彩描写においてより精緻な技巧を凝らしていたことを明らかにした。③では、王漁洋が、「煙」たなびく絵画の空間に「雁聲」「笛聲」などの多彩な聴覚によって描写していることを論じた。最終的に「空間の朦朧化→色彩感覚による描写」「空間の朦朧化→聴覚による描写」「空間の朦朧化→色彩感覚+聴覚による描写」という三種類の技法が存在することを確かめた。第三節では、このような技法を駆使した王漁洋の作品が中国文学史上に占める位置を検討し、彼がこのような作風を採用したのは、「古典詩の枠組みを破ることなく、しかも過去の作品に似ない詩を書く」ためであった、という結論を下した。前後七子の事実上の後継者であった彼は、一たびその気になれば、「朝天峽」のような杜甫の秦州を意識した傑作をたちどころに仕上げることができる力量をそなえており、そのことは夙に清代の乾隆年間の文学者沈德潜によって指摘されている。第四節では、青年期の「聞雁」に始まり、「答鍾聖輿送芍藥」詩に至る、「煙」に満たされた空間において、横たわった姿勢でひたすら聴覚、嗅覚にひたるという王漁洋の最高傑作の系譜にふれ、第五節では最晩年の王漁洋の詩業に触れた。この時期王漁洋は「煙」漂う詩を殆んど書かなくなる。王漁洋がいかに細心の注意を払ってこの種の詩を作っていたか、「偶然に書かんと欲す」と称していた彼がいかに技巧を凝らしてこのタイプの詩を作っていたかを晩年の詩を材料として論じた。「書かなくなった」のではなく「書けなくなった」のである。

第三章 王漁洋の詩学—うつしの詩学からゆらぎの詩学へ

前言では、現在書かれている詩文は作者と読者との間の共振関係を伴わない無価値な作品だという危機感は元末明初の宋濂あたりに始まることを論じた。第一節では、そのような危機感に基づき、明代の中葉に始まった古文辞派の文学運動に焦点を当て、彼らが模倣と創造の問題をどのようにとらえていたのかを、何景明、李夢陽の間にかわされた激烈な往復書簡に探り、サークル内の重要人物である王廷相が彼らの議論をどのように調停したかを論じた。「法」を重視し創作は模倣から始まると主張した李夢陽に対し、それでは永遠に本物の詩にはならないと何景明は主張した。王廷相は二人の理論を調停して、古代から唐代にいたる過去の詩風を十分に弁別してとらえ、作詩の技法を確立した後によりやくそれにとらわれずに詩作できるようになり、更に「悟入」すれば、これまでの模倣で身につけたものが、化学変化を起こして自己の所有物となり自在な試作が可能となると主張した。第三節では、山東の名家であった王漁洋の一族から古文辞派の文学理論に従って詩作する人物が数多く出たことを王象春をはじめとする祖父の世代の人々の作品を分析することによって実証した。第四節では、王漁洋の修行時代に焦点を当てて、古文辞派の理論に基づき、唐詩の模倣から文学修行を始めたこと、その対象は古文辞派が強く推奨した李白、杜甫ではなく、傍系の王維・韋應物らであったことを実証した。第五節では、まず明末から清初にかけて文壇の巨公錢謙益が著書である『列朝詩集』において行った古文辞派に対する根本的な批判を分析した。本節ではさらに王漁洋の錢謙益との出会いを取り上げ、錢謙益に弟子の礼を取り、詩文に序文を書ってもらったことから、もはや古文辞派の公理系の中で自らの詩論を組み立てることができなくなったことを論じた。第六節では、王漁洋の詩学の本体を論じた。模倣によって詩にそれらしい外見を与えるための詩学を「うつしの詩学」、「うつしの詩学」によってそれらしい外見を得た上で、「興會」（インスピレーショ

ン)によって読者の心にゆらぎの感覚をもたらし、詩人との共振関係に入らせる、王漁洋のこのような理論を「ゆらぎの詩学」と定義し、それぞれを詳論した。前者については『帶經堂詩話』の自述類、『漁洋詩話』『池北偶談』などを材料として、彼以前の詩人、同時代詩人の佳句を収集して徹底的に学ぶこと、古詩については平仄の法則を厳密に守ること（古詩は本来平仄の法則からは自由なはずなのであるが王漁洋の詩学ではそうではなく厳格な規則が存在したのである）などに帰納されること、後者についてはすでに論じた詩の空間に「煙」のヴェールを掛け、具体的な描写を避け、色彩感覚、聴覚、嗅覚といった感覚で描写を行う。地名を多く読み込んで、様々な史実を読者に喚起させる、というような手法に帰納される。

第四章「王漁洋の古詩平仄論—七言古詩を中心として—」

本章は「うつしの詩学」の重要な一部門である「古詩平仄論」を詳細に論じた。第一節では、古詩平仄論の来歴に関する3つの仮説を検証し、最終的にこの理論は王漁洋自身が創造した可能性が強いという結論を下した。翁方綱の著『清詩話』に収録された「王文簡公古詩平仄論」には、平韻到底七言古詩平仄論、仄韻到底古詩平仄論、換韻する七言古詩平仄論の3部門があるが、第二節ではこのうち、平韻到底七言古詩平仄論と仄韻到底古詩平仄論を取り上げ、「(1) 出句の第五字目は仄字を用いる。平字を用いたら第六字目が仄字になる。/ (2) 出句の第二字目は平字を用いる。/ (3) 落句の第五字目は必ず平字を用いる。第五字目が平字ならば、第四字目は必ず仄字になる。/ (4) 落句の第五字目、第四字目の平仄が合えば、第二字目は平字仄字でもよいが、平字を使う方がよい。/ (5) 落句は下三平にするのが標準である。」という五つの法則を帰納した。さらに『漁洋山人精華録』に収められた王漁洋の平韻到底七言古詩すべてについて調査を行い、高い確率でこの法則が満たされていることが確認された。仄韻到底古詩平仄論の法則は「仄韻到底七言古詩の場合には、出句の第二字目と落句の第二字目、出句の第五字目と落句の第五字目、この二組のペアのうちに、最低一組に平仄の対立が必要である」であるが、これも『漁洋山人精華録』に収められた王漁洋の仄韻到底七言古詩で検証すると、約八割の確率で満たされていることが判明した。更に第一章でとりあげた王漁洋の門人汪懋麟の詩作を材料にして、師の理論が門人にある程度継承されていることも確かめた。

第五章 乾隆朝の王漁洋評価—四庫全書総目『漁洋山人精華録』提要を中心として 漁洋山人精華録四庫全書総目提要を材料として、清代中期の詩壇が王漁洋の文業に対してどのような評価を下していたのかを探究したものである。漁洋山人精華録の提要は、第一段、王漁洋の籍貫、経歴の記述の所在個所の明示、第二段『精華録』の成立事情、第三段、王漁洋の詩論の性質、第四段、王漁洋の声望、第五段、王漁洋の反対者、第六段、王漁洋の詩業に対する客観的評価、第七段、王漁洋の文学史上における地位、第八段、結語という八段落に分かれるが、それぞれ引用書を確認し、関連する資料を駆使して内容を検証し、この提要が乾隆帝と四庫館臣が王漁洋を清初の「巨公」すなわち時代を代表する最大の大家であると認定していたと結論付けた。

学位論文審査結果の要旨

1) 研究テーマが絞り込まれている

本論文が取り上げる研究テーマは、王漁洋という清朝の文学者の詩とその理論である詩論である。このテーマは本論文の中心となる軸をなし、第一章から第五章まですべてにわたり、貫かれている。論文全体で「詩」という文字が 1278 箇所、「詩論」という語も 33 箇所にみえるのは、そのことをよく証明している。論文全体がこのテーマの考察にかかっているとあってよい。研究テーマが十分に絞り込まれていると認められる。

2) 論文の方法論が明確である

本論文は中国文学専攻の論文である。中国文学もふくめて中国哲学や東洋史の領域では、綿密詳細な文献研究が中心となることが多い。その場合の方法論としては、その文章が載っているさまざまな版本を校勘し、文字の異同を確定していきながら、考察するという手法がとられる。本論文は伝統的な中国学のその方法論をとっている。方法論は極めて明確であるといえる。

3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている

王漁洋の詩に関する訳注・解説としては高橋和巳の『王士禛』(岩波詩人選集第二集、1962)、橋本循の『王漁洋』(集英社、漢詩大系、1965)がある。王漁洋の詩論に関する代表的な先行研究としては、鈴木虎雄の『支那詩論史』、青木正兒の『清代文學評論史』がある。いずれも概説的なものにすぎず、本論文はそれらの先行論文をふまえた上で、異なる角度から王漁洋の詩論を考察したものである。それ以外に近年、荒井禮および陳旭、蔣寅など中国の研究者の著したものが、それらも十分に検討されている。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している

論文の方法論のところでも述べたが、本論文は伝統的な中国学の手法をふまえた論文である。基本文献は論文の最後の参考書目に 72 挙げられている。そのうち、王漁洋の名がみえるものは 18 見えるが、そのうち最初の 12 だけ列举すると、①漁洋山人精華録訓纂附惠棟註補漁洋山人自撰年譜 清惠棟撰 吳縣惠氏紅豆齋刊本②感舊集 清王漁洋輯 乾隆十七年德州盧氏雅雨堂刊本③香祖筆記 清王漁洋撰 康熙四十四年刊本④漁洋詩集 康熙中刊本⑤漁洋續集 康熙中刊本⑥漁洋山人秋柳詩箋 清王祖源撰 叢書集成簡編所収據天壤閣叢書排印本⑦漁洋山人精華箋注 清金榮撰 徐淮纂輯鳳翽堂刊本⑧漁洋山人精華錄會心偶筆 清伊應鼎撰 乾隆二十三年自序刊本⑨王漁洋遺書 康熙乾隆間刊本⑩王士禛年譜 清王士禛撰 孫言誠點校 中華書局 1992 年刊⑪蠶尾後集 王漁洋叢書所収本⑫漁洋山人精華錄 四部叢刊所収康熙四十九年跋刊本といったものになる。研究の素材となる基本文献、資料については清朝の刊本にまで目を通しており、非常に精密である。なお調査データというのは、文系の古典の分野にはなじまないが、「煙」という概念を含む言葉に注目した松村昂のデータを参照しつつ、自ら数えなおして検証している。このように幅広く基本文献が吟味されていることが認められる。

5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している

本研究の第一章「揚州時代の王漁洋—汪懋麟の作品を手がかりとして」は、揚州時代の王漁洋の詩作の特徴と、揚州出身の若い世代の詩人たちに与えた影響の大きさを、直弟子

と言える汪懋麟を取りあげて論じており、従前の研究をさらに一步深めたもので、高く評価される。第二章「王漁洋詩論」は、松村氏の研究を承けて、王漁洋の表現の特色を「煙」とその類語の使用法から論じたもので、王漁洋の作品の特徴、さらには本質をよく捉えたものと言える。第三章「神韻説再考—うつしの詩学からゆらぎの詩学へ」は、第二章とつながり、本論文の核心部分である。明代古文辞派の流れを承けた王漁洋の詩と詩論について、その淵源と独自性を実証的に論じて視野の広い論述となっており、説得力を持つ。王漁洋詩文の研究に際して拠るべき基準となると言えよう。晩年の「答鍾聖興送芍薬」詩を王漁洋の詩作と詩論の到達点とする指摘は鋭く、極めて妥当な見解である。第四章「王漁洋の古詩平仄論—七言古詩を中心として—」は、これまで具体的に検討がなされてこなかった王漁洋の「古詩平仄論」について、はじめて具体的実証的に論じたものである。第五章「四庫全書総目『漁洋山人精華録』提要における乾隆朝の王漁洋評価—後書きにかえて—」は、「四庫全書総目」の原文の注解を通して清代における王漁洋評価について論じ、かれの文学をその生きた時代において捉えようとしたものである。よって研究テーマについて先行研究にはない新しい知見を打ち出していると認められる。

6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている

本研究において、第四章「王漁洋の古詩平仄論—七言古詩を中心として—」は、古詩に関する平仄を論じたものである。まず古詩平仄論の来歴を検証し、この理論が王漁洋自身の創造になるであろうと結論した。翁方綱の『清詩話』所収の「王文簡公古詩平仄論」には、平韻到底七言古詩平仄論、仄韻到底古詩平仄論、換韻する七言古詩平仄論の3部門があるが、このうち平韻到底七言古詩平仄論と仄韻到底古詩平仄論を取り上げ、「(1) 出句の第五字目は仄字を用いる。平字を用いたら第六字目が仄字になる。/ (2) 出句の第二字目は平字を用いる。/ (3) 落句の第五字目は必ず平字を用いる。第五字目が平字ならば、第四字目は必ず仄字になる。/ (4) 落句の第五字目、第四字目の平仄が合えば、第二字目は平字仄字でもよいが、平字を使う方がよい。/ (5) 落句は下三平にするのが標準である。」という五つの法則を帰納した。そのことを『漁洋山人精華録』中の平韻到底七言古詩すべてについて調査し、その法則の妥当性を確認している。これらの議論は十分、実証的である。この論文がアジア研究で権威ある学術雑誌である『東方学』に掲載されたことは論文の妥当性が認められたことを示している。新たな知見を裏付けるための必要にして十分な議論と実証が展開されていることは明らかである。

7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である

本研究のテーマである王漁洋は文学史上、詩論「神韻説」によって知られる。現代の中国においては、その詩作自体と詩論に関してのものは多くないが、王漁洋自体に関する出版物はある。これに比べ、日本における王漁洋に関する出版物はほとんどなく、研究も極めて少ない。明清の詩文は宋代以前のそれに到底及ばないとされ、小説・戯曲などの俗文学を除くと清代詩文の研究者自体も日本では寥々たるものである。詩経以来、二千年におよぶ中国の詩文の歴史についての相応の知識と視野の広さがなければ十全に理解し、味わうことが難しい。ネイティブではない我々日本人にとって、清代詩文を精密に研究することは極めて敷居が高かった。これまで数少ない碩学たちが、ごく一部分を日本に紹介しているに過ぎない。大平氏は、本論文の随所にあらわれているように、中国の歴代の詩文について、広く深い見識を有しており、それゆえに氏の王漁洋研究は中国文学の研究領域に新たな地平を切り開く、独創的な知見を備えた論文であると認められる。

以上の評価を踏まえて、本審査委員会は本論文を博士の学位に値するものと判断する。

以上